

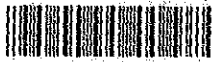
スリ・ランカ国
国立医学研究所プロジェクト
計画打合せ調査団報告書
(1990.1.6~1.15)

平成2年2月

国際協力事業団
医療協力部

医 協
J R
90-03

JICA LIBRARY



1084313(4)

21504

スリ・ランカ国
国立医学研究所プロジェクト
計画打合せ調査団報告書
(1990.1.6~1.15)

平成2年2月

国際協力事業団
医療協力部



序 文

国立医学研究所は、スリ・ランカ国唯一の医学研究機関として、研究、検査、教育といった使命を有しており、スリ・ランカ国は我が国に対し同研究所における検査技術、基礎研究、技師教育、実験動物管理、および生物製剤の各分野に係る技術協力を要請越した。これを受けて国際協力事業団は1988年8月、実施協議調査団を派遣して、討議議事録（R/D）に署名し、1989年1月1日より5年間の予定でプロジェクト方式技術協力を開始した。

現在までに、実験動物、臨床検査技師教育を対象とし、7名の専門家派遣（内2名が長期専門家）、5名の研修員受け入れ、及び機材供与を実施してきた。

係る背景に基き、プロジェクトの進捗状況と問題点を把握し、今後の協力計画の見直しをすることを目的に、平成2年1月6日から1月15日まで、新潟大学医学部教授、大西義久氏を団長とする、計画打合せ調査団を派遣した。

本報告書は、その調査結果をとりまとめたものである。

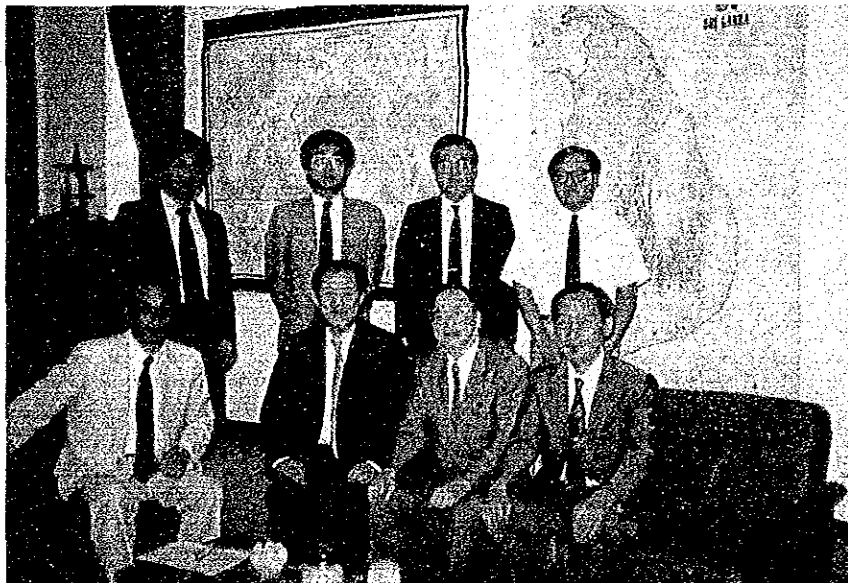
ここに、調査団員各位並びに本プロジェクトに係る協力機関各位に対し、深甚な謝意を表するとともに、今後ともひきつづきご協力を賜りたくお願いする次第である。

平成2年2月

医療協力部長 近藤 健文



ミニッツ署名。左よりVitarana所長， Fernando次官，
大西団長， 小島団員。



日本大使館表敬訪問。後列左より， 小室団員，
小嶋団員， 川嶋調整員， 久保田書記官，
前列左より， 新田大使， 大西団長， 小島団員，
浜田団員。



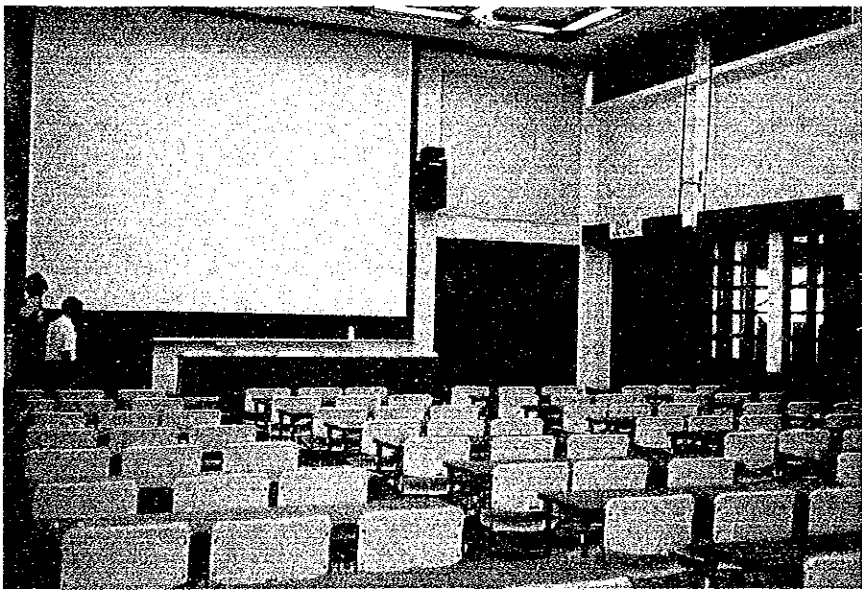
MR I 幹部との協議。大西団長より左に、
Vitarana 所長, Attapattu 副所長他。



旧建屋内の日本人専門家室。新建物完成とともに
新屋へ移転予定。



増築中の現場視察。左より、浜田団員、
Withana 主任、大西団長。



完成済の臨床検査技師教育用の講堂。

目 次

1. 計画打ち合わせ調査団の派遣	1
1-1. 調査団派遣の経緯と目的	1
1-2. 調査団構成	2
1-3. 日 程	2
1-4. 主要面談者	4
2. 要 約	6
3. プロジェクトの現状および問題点	8
3-1. 投入実績（専門家派遣、研修員受入れ、機材供与）	8
3-2. 現地における技術協力への対応	11
3-3. 協力部門別活動	12
3-4. 今後の課題	15
4. 今後の協力計画	17
4-1. 専門家派遣	17
4-2. 研修員受入れ	17
4-3. 機材供与	17
4-4. ワークショップ開催	18
4-5. 広報資料作成	18
4-6. その他	18
4-7. 無償資金協力について	19
5. プロジェクト実施上の留意点	20
資 料	
1. ミニッツ	23
2. M R I 組織図	33
3. M R I 主要スタッフリスト	35
4. 第1回コーディネーティングコミッティー議事録	40
5. M R I 1988年 年報	42

1. 計画打ち合わせ調査団の派遣

1-1. 調査団派遣の経緯と目的

1) 要請内容および背景

国立医学研究所は、スリ・ランカ国唯一の医学研究機関として、研究、検査、教育といった使命を有しているが、建物、施設が老朽化し、かつ指導的人材が少ないという問題を抱えていた。そこで、ス国は我が国に対し検査技術、基礎研究、技師教育、実験動物管理、生物製剤の各分野に係る技術協力を要請越した。これを受けて双方で協議した結果、協力は2段階に分け、第一段階では、1)検査機能の充実、2)リファレンス機能の充実、3)検査技師教育体制の整備をはかり、第二段階では、4)生物製剤、5)基礎研究の開始を目指すこととした。1988年8月、実施協議調査団を派遣した際に、討議議事録(R/D)に署名し、1989年1月1日より5年間の予定でプロジェクト方式技術協力を開始した。

上記技術協力と連携する形で、現在、無償資金協力(約29億円)により、建物の増築が進められており、平成2年初頭に完成予定である。

2) これまでの経緯

プロジェクト開始第一年目にあたる本年度は、スリ・ランカ側と討議議事録署名の際に合意された協力分野の中から、本研究所の基礎部門になる実験動物、臨床検査技師教育を中心に機材を供与し、研修員受け入れ、専門家派遣を実施中である。

今までに実施した協力実績は以下のとおりである。

a. 研修員の受け入れ

Mrs. ビーチャム (MLT)	婦 国
Mr. ヘラート (医療機器保守)	婦 国
Dr. ヴィターナ (ウイルス学)	婦 国
Dr. ティセーラ (電子顕微鏡、病理)	現在研修中
Mrs. ジャヤシンハ (実験動物)	現在研修中

b. 専門家派遣

川嶋武 (業務調整)	1989年6月に赴任
松下福代 (実験動物)	1989年12月に赴任
免疫学ワークショップ	1989年8月に計画したが、スリ・ランカ側の突発的事情で急遽中止

c. 機材供与

平成元年度供与機材(6,000万円予算) 現在、購送手続き中

3) 調査目的・内容

計画打ち合わせ調査団は、プロジェクト発足後、その実施計画の妥当性を検討するための調査団である。具体的には、プロジェクトの進捗状況と問題点の把握に努め、R/D、TSI締結後の詳細な年次計画を検討し、プロジェクト協力の適正化を図ることを目的とする。

本プロジェクトの場合、平成2年初頭に無償資金協力による建物の完成を控えており、技術協力と無償資金協力との円滑な連繫を図るため、現時点でサイトを視察し、可能な範囲内で、微調整を行なうことが必要となっている。また、昨今のスリ・ランカ情勢の悪化により、今年度の協力計画を変更した経緯もあり、早急に来年度以降の協力計画を見直す必要に迫られている。

今回の調査団の具体的調査内容は、以下のとおりである。

- a) 建築現場の視察し、技術協力との円滑な連繫を図る
- b) ペレットマシン等の平成元年度供与機材の設置場所の確認
- c) 今年度研修員残り1名の決定
- d) 平成2年度の協力計画策定（機材供与）
- e) 平成2年度の協力計画策定（専門家派遣）
- f) 平成2年度の協力計画策定（研修員受入）
- g) 細分化された各部門の統合化
- h) 蛇毒血清部門の今後の協力方針について
- i) その他

1-2. 調査団構成

団長	大西 義久	総 括	新潟大学医学部教授
団員	濱田 忠弥	ウイルス学	新潟大学医学部教授
団員	小島 健一	医学教育	新潟大学医療技術短期大学部教授
団員	小室 勝利	免疫学	予防衛生研究所血液製剤部部長
団員	小嶋 雅彦	協力計画	JICA医療協力部医療協力課

1-3. 調査日程

月 日	時間	行 程
1/7 (日)	13:15	コロンボ着 (TG-307)
	15:00	団内打合せ。今後の調査日程、主要協議事項等を、プロジェクト側と打合せる。

1 / 8 (月)	9:00	JICA事務所にて打合せ。大西団長より、今回の調査団の訪問目的を説明する。安木所長より、スリ・ランカの治安状況、プロジェクトの最近の動向についてブリーフィングを受ける。
	10:30	日本大使館表敬訪問。団長より今回の調査目的を説明するとともに、今後のプロジェクト運営に対する大使館からの協力を要請する。新田大使、久保田書記官より、スリ・ランカに対する援助の長期的展望、医療状況等について説明を受ける。
	11:50	大蔵企画省対外援助局訪問。無償課長 Mr. Weerapana 氏に対し、調査目的を説明し、今後の協力につき協議する。
	14:00	保健省訪問。Dr Maligha Fernando 次官に対して、十分な要員の確保およびプロジェクトに必要な施設・土地の提供を要請する。
	15:00	国立医学研究所 (MRI) 訪問。Dr. Vitarana 所長に、今回の調査団の訪問目的を説明し、今後の協議日程について打合せる。その後、現在建設中の新建屋を視察する。
	1 / 9 (火)	9:00
15:00		MRIにて、89年度および90年度C/P研修員、候補者3名にインタビュー。
19:00		団内にて打合せ。C/P、専門家、機材の90年度計画について団内で検討する。また、建屋の視察に基づく、各団員の意見、要望を集約する。
1 / 10 (水)		10:00
	14:00	MRIにて、Dr. Jorge Fernando 検査部長を交えて協議および視察。
	16:45	工事関係オフィスにて建物建築について意見交換。
	1 / 11 (木)	9:00
11:00		MRIにて最終討議。ミニッツ原案を双方で作成。
15:00		ミニッツ読み合せ。

1/12 (金)	10:00	保健省にてミニッツ署名。
	11:00	JICA事務所に報告。
	12:30	大使館に報告。
	14:00	対外援助局に報告。技術協力担当のMr. Passaperumaと今後の協力につき協議する。
	16:00	新国会議事堂内にて、保健大臣と会談。ミニッツを手渡し、プロジェクトに対する協力につき協議する。
1/13 (土)	9:00	団内で、今後の具体的協力スケジュールを協議する。その後、各自、報告書の作成にあたる。
1~14 (日)	11:00	コロンボ発。

1-4. 主要面談者

スリ・ランカ側

保健省

Dr. Malinga Fernando	保健省次官
Dr. Joe Fernando	” 医療局長
Dr. Jorge Fernando	” 検査部長
Dr. Tissa Vitarana	医学研究所所長
Dr. (Mrs.) M. C. Attapattu	” 副所長
Dr. R. S. B. Wickremasinghe	” 細菌学主任
Dr. T. J. P. Rajnayake	” 細菌学Ⅱ 血清学
Dr. (Mrs.) N. Withana	” ウィルス学主任
Dr. (Mrs.) B. De Mel	” 生化学、栄養学部
Dr. (Mrs.) P. Premachandra	” 生化学、栄養学部長
Mrs. N. Jayasekera	” 寄生虫、昆虫部長
Dr. W. H. Herath	” 医療機器センター部長
Dr. U. K. Samuel	” 生化学、栄養学部長
Dr. A. Sathasivam	” ワクチン製造部長

大蔵企画省

Mr. B. H. Passaperuma	対外援助局 技術担当
Mr. S. Weerapana	” 無償 ”

日本側

新田 勇	特命全権大使
久保田 英	日本大使館書記官
安木 秀夫	JICAスリ・ランカ事務所長
山下 寿郎	“ プロジェクト担当
新納 宏	“ 無償担当
川嶋 武	MRIプロジェクトチーム 調整員
松下 福代	“ 専門家
西村 哲夫	久米建築事務所（スリ・ランカ）所長
塚田 善一	“ スタッフ

2. 要 約

MR Iはスリ・ランカ国の医療・保健に関する唯一、最高の機関であることは従来調査からしても疑いがない。今後、この視点にたった研究教育・業務の具体的設定が必要である。この視点を踏まえた1989年12月21日の国内委員会の合意に基づいて以下の諸点について討議することであった。

1. 新MR I (phase 1および11) の工事進行状態を実見した上で技協としての手直しの有無の検討。
 2. 動物飼料作成および作業衣洗濯のための場所の確保。
 3. 新MR I運営に関し必要な人員の確保。
 4. 研修員について1989年度枠1名、1990年度3名の決定。
 5. 1990年度予算に関する件
 6. MR IのCoordinating CommitteeおよびRegroupingの活動状況とその他スリ・ランカ側の要望を直接聴取すること。
 7. 蛇毒抗血清に対するスリ・ランカ側の対応の再確認などであった。
- 1) 工事関係者立ち会いのもとで調査の結果、建築の進行状況は満足すべき状態であるが、空調作動時の調査 (high risk室およびanimal center)やanimal centerの一部に多少の手を加えることになった。また開所式は来る4月の第1週を予定することになり、Herlath 保健大臣に面会し大統領の出席を要請した。
- 2) 飼料作製と作業衣の洗濯場の場所確保についてはG. Fernando次長とともに現場で検討の結果、十分に目的を達成しうる新しい土地を確保することが出来、そこまで現工事で電気、水道、排水などの配管をしておくことになった。
- 必要人員についてはFernando次官によればVitarana所長の申し出についてはすべてOKをしたとのことであるが、工事の終了を目前に控えていることもあって、建物保守の人員が何時から配置されるかが緊急課題であるが明確な回答は得られなかった。
- 3) 研修生 (薬理学部門) についてはCoordinating Committeeと本人の希望を十分に聞いた結果、内分泌学の診断を主眼にして帰国後に関係方面と調整することとした。また1990年度については細菌学の2名はOKとし、1名 (医昆虫学) は保留とした。
- 4) 1990年度供与機材予算については計画を聴取し、総予算枠の10%を当初は保留することにした。現場の活動状況に応じて実効を上げうように配分するためである。
- 5) 蛇毒の抗血清問題は当該国の政治状況と絡み難しい問題であるが、初期の方針どおりパイロットスタディとして取り扱うことになった。
- 6) MR IのCoordinating Committeeは必ずしも円滑に動いていないとの印象を受けた。

以上、今回の主目的である土地確保とMRI内部の人事問題については互い合意をみることができ、合意点についてはミニッツを作製し、1月12日に署名を行った。MRI側では生化学、細菌学の部門でワークショップ開催を希望している。今後はいかにしてMRI内部の勤労意欲を高めるかが問題になる。そのためにも新MRIのアピールのためのパンフレットを現地で作製することになった。

なお現在の建物の利用についても今後の活動と関係があると考えられるので会議の席上、概略を聴取した。

3. プロジェクトの現状および問題点

3-1. 投入実績

専門家派遣、研修員受け入れ、機材供与のこれまでの投入実績は以下のとおりである。

1) 専門家

指導科目	氏名	派遣期間
蛇毒血清（長期調査）	牧野 正顕	'87. 8. 6～ '87. 8. 21
実験動物（ " ）	佐藤 徳光	'87. 8. 8～ '87. 8. 21
調整員	川嶋 武	'89. 6. 1～ 現在
協力計画	曾我 淳	'89. 6. 3～ '89. 6. 10
協力計画	小島 健一	'89. 6. 3～ '89. 6. 10
実験動物	佐藤 徳光	'89. 7. 31～ '89. 8. 12
実験動物	藤沢 信義	'89. 7. 31～ '89. 8. 12
実験動物	松下 福代	'89. 7. 31～ '89. 8. 31
免疫学ワークショップ	松橋 直	スリ・ランカ国内事情のため 派遣中止
"	小島 健一	
"	小室 勝利	
"	本間 慶一	
"	五十嵐 章	
実験動物	松下 福代	'89. 12. 7～ 現在

2) 研修員受け入れ

次表のとおり。

スリ・ランカMRI C/P研修員

年度	枠	待遇	研修科目	氏名	現職	受入期間	受入先
87	個別	準高	医学研究	Mr. Upali Tissa Vitarana (Dr.)	MRI所長	1987. 5. 5~1987. 6. 16	厚生省、予研、新潟大他 (医学研究所ワークショップ)
87	個別	一般	医学研究	Ms. Piyaseeli Premachandra (Dr.)	MRI細菌部長	"	"
88	C/P	一般	MLT教育	Ms. Manel Sriyani Beauchamp	MLT教授	1989. 1. 10~1989. 7. 2	新大、医療技術短大
88	C/P (無償)	一般	医療機材	Mr. Mesala Herath M. W. Herath (Dr.)	生化学部門研究員	1989. 2. 28~1989. 11. 29 12/13まで延長	新大、新潟薬科大、医療メーカー
88	C/P	一般	ウイラルス学	Ms. Kaliji Withana (Dr.)	ウイラルス学部門研究員	1989. 3. 14~1989. 12. 21	新大、ゾンカ生研、SRL、予研
89	C/P	一般	電子顕微鏡	Ms. Paigamage Karuna Ariyalatha De (Dr.)	病理部門責任者	1989. 6. 13~1990. 4. 4	新大、日本電子
89	C/P	一般	実験動物学	Ms. Sharmini Jayasekera	実験動物舎責任者	1989. 7. 25~1990. 1. 25	予研、新大

3) 機材供与

平成元年度の主な供与機材は以下のとおりである。本年度は、プロジェクト開始第一年目にあたるころ、MRIの基盤部門となる実験動物、MLTの両部門に重点を置いた。本邦調達分は、現在入札中で現地到着は、平成2年度初頭になる予定である。現地調達分（コンピューター、実験動物用機材、白衣等）は、すでに調達済である。

(品目)

1. 医療機材

1) 実験動物部門

- ・飼料形成機、粉砕器、乾燥機
- ・実験動物、飼料
- ・その他（ビニールアイソレーター、小型遠心器、飼育棚、落射蛍光顕微鏡、撮影装置、等）

2) 臨床検査技師教育部門

ミクロトーム、血球計算盤、血球ピペット、フラスコ、メスシリンダー、試験管、等

3) その他の部門

（ウイルス、病理、細菌、生化学、昆虫部門等）

グラジェントメーカー、スウィングローター、オートスチル、マルチャンネルピペット、恒温器、実体顕微鏡、分光蛍光光度計、等

2. 医薬品

検査試薬、実験試薬等

3. 一般機材

実験動物用機材（ラック、ロッカー 等）

4. 書籍

教育用図書、教科書

5. 現地調達

- ・臨床検査技師教育用コンピューター、プリンター
- ・実験動物用機材（清掃用具、着衣、等）
- ・白衣

6. 輸送費

合 計 60,000 (予算額)

3-2. 現地における技術協力への対応

3-2-1. Coordinating Committeeの組織化と活動

技術協力が開始されたが、counterpart側の体制作りが進展しないので、JICA所長、川嶋調整員が保健省次官M. Fernando博士を長とする同上委員会の発足を促し、その第1回委員会が昨年12月に開催された。JICA所長が強い調子でcounterpartの真剣な対応を迫った。これによって、技術協力に向けてのMRIの具体的対応体制が動き始めた。しかし、スリ・ランカの現状から、各部局とも予算の削減を求められている中で、MRIの予算がどれほど増額されるかは楽観を許されない。

3-2-2. MRIの定員枠の増員

給与・定員委員会 (Salaries and Cadres Committee)は日本政府の無償資金協力によるMRI改善プロジェクトに対応して、定員増を承認した。ただし、*の職種は新人の採用ではなく、他部局の余剰人員を振り向けるとのことである。

staff category	additional cadre
1. Deputy Director	01
2. Medical Officers	28
3. Senior Research Officers	20
Research Officers	
Physicist	
Medical Statistician	
4. Veterinary Surgeons	02
5. Accountant *	01
6. MLTT	48
MLTT (Tutor)	05
7. PHII	05
8. Glass Blower	01
9. Technical Assistant	07
10. Field Attendants	04
11. Nurse	01
12. Librarian	01
13. Secretary to the Director *	01
14. Clerks	07
15. Telephone Operator *	01
16. Typists *	08
17. Laboratory Orderlies *	26

18. Assistant Overseer *	01
19. Drivers *	03
20. Labourers *	24
21. Skilled Workers	05
22. Sanitary Labourers *	04
23. Watchers *	06

現在、維持・管理部門にJ.T.O (Junior Technical Officer) を7名募集中であるが、民間給与との格差のため、応募を期待できるかどうか不明であるという。かさねて、新研究棟の発足に間に合うように強く採用方を要請した。

3-3. 協力部門別活動

無償資金協力による新研究棟が建築途中のため、1989年1月1日に始った技術協力は、counterparts 派遣研修員の日本における研修が主であり、日本からは、長期派遣の調整員、専門家1名のほかは、調査団の派遣程度にとどまった。

なお、1989年夏から秋にかけて、政治・社会状況悪化により国の機能が停止したが、MRIの活動も例外ではなかった。その後遺症からようやく最近脱却しつつある状態である。新研究棟の完成を目前にして、帰国研修員の地道な準備活動が注目される。

無償資金協力による第1期工事分の実験動物センター、講堂、検査技師学校実習室は完成したが、その竣工を記念する「免疫学ワークショップ」は一時的な社会不安により中止の止むなきに至った。その後、情勢の好転とともに、記念式が挙行されたが、第2期工事の真っ最中には、これらの新築棟への通行がはばまれていたため、実質的な利用は遅れている。

技術協力による機材供与は、その配分をめぐる決定が遅れたため、供与手続き中であり、そのことも新築棟の利用が遅れている一因である。

3-3-1. 研修員の活動

1) 1988年度研修員

(1) Mrs. M. S. Beauchamp(臨床検査技師学校主任講師)

新潟大学医療短大で主に、カリキュラム編成、免疫学、微生物学、臨床化学(一部)の実習とその指導について研修した。また、新潟大学医学部附属病院検査部、信楽園病院検査部、虎の門病院検査部、予研(血液製剤部、寄生虫部、腸内ウイルス部)、京都大学医療短大、神戸大学医療短大などを視察した。

帰国後、機能麻痺状態の学校活動の建て直しにつとめた。新築の講堂を利用して、学生の卒業試験、秋の第1期工事完成祝賀式典と同時に卒業式が挙行された。すべての大学が閉鎖されているなかで、教育が行われたことを評価したい。その後、留年生の卒業試験、新実習室での講義が行われている。

新入生の受入れは未定であるが、教科書作成、講義・実習のカリキュラムの改善などを課題としている。機材が未到着なため、教室実習はまだほとんど行われていない。

専任講師の枠が5名増えたが、現在のところ増員の見込みがないうえ、1名が定年延長が切れるので、教育スタッフの不足が深刻であり、今後相手側に増員を強く求めるべく要請した。

(2) Dr. N. Withana (ウイルス学部門)

新潟大学ウイルス学教室、ついでデンカ生研社、SRL社の研究室ならびに国立予防衛生研究所で研修した。優秀な資質に加えて、日本語の学習に熱心であった上、積極的に親しみ易い性格を活かして、主にウイルス検査診断学、検査試薬作成の面で研修の実をあげた。

帰国後、まだ新研究棟が未完成のため、Colombo South HospitalとMRIで日常検査業務に携わるかたわら、新研究棟における業務研究計画を準備しつつあり、研修効果の発揮が期待される。

(3) Dr. W. M. H. M. Herath (機器維持管理部門兼薬理・製薬部門)

当初、新潟大学薬理学教室、ついで新潟薬科大学薬化学で薬理学、薬剤有機合成について、研修した後、主に東京の各機器メーカーで機器の取扱い、維持、管理を研修した。本来、生薬の分離抽出と構造決定を専門とするだけに、とくに薬剤合成について強い関心を示し、研究プロジェクトに参加して、毎日夜おそくまで実験に従事した。

滞在期間の後半は、主な研修目的である機器の維持、管理の研修に向けられた。メーカーが用意したスケジュールは、研修員の希望をいれて再三訂正され、滞在期間を予定より延長したほどであった。しかし、研修先が多数の施設にわたるため、受入れ側に十分な指導体制が整っていないところもあり、すべて満足とはいかなかったようである。研修担当者の努力と誠意は評価に値するが、この種の分散した研修の難しさを示すものといえよう。

2) 1989年度研修員

(1) Dr. R. K. A. de Tissera (病理学、電子顕微鏡)

新潟大学病理学教室を中心として、病理解剖、病理標本診断(細胞診)、検討会、スライド作成などの病理学研究・業務を通じて、病理学部門の運営を学ぶかたわら、主な研修対象である電子顕微鏡について研修中である。電子顕微鏡はメーカーによる研修も終えて、供与される機種による研修も予定されるなど、きめこまかな配慮がなされている。また今後、市中病院の病理部門の見学やセミナー、日本病理学会へ出席させ、日本における日常業務と研究のあり方を学ばせる予定である。

(2) Dr. S. Jayasekera (獣医学、実験動物センター)

新潟大学実験動物施設および予防衛生研究所獣疫部実験動物室において研修をうけている。前者では主に正常動物の飼育・維持一般について基礎的な研修をうけ、後者においては、疾病動物の管理についての研修をうけた。そのほか、動物の餌の製造についても研修をうけた。

MR Iの実験動物センターはすでに完成しているが、研究棟が未完成の上、餌の製造施設の設置が必要であるため、動物の搬入は4月以降になる模様である。

(3) Dr. T. M. J. Munasinghe(臨床薬理学)

今回の調査で面接の上、今年度の最後の研修員として内定した。希望する研修内容は、新薬の臨床的研究、ホルモン定量、薬理学の基礎的研究技術習得、薬剤の品質管理などを含み、広範過ぎるので、もっと焦点をしぼることとした。当人は、臨床内分泌学に特別の関心をもっている。品質管理は含めないこととなった。研修先は新潟大学第1内科を主とするが、一部の他施設における研修についても検討することとした。

3-3-2 専門家の派遣

技術協力の初年度であり、とくに無償資金協力による建築の途中であることもあって、専門家の派遣は全くその緒についたばかりである。とくに、チームリーダーを欠いているため、諸事に配慮しなければならない調整員の苦勞はひとしおである。加えて、派遣の2名とも Deng 熱の流行に見舞われており、派遣専門家の健康管理が今後とも重要である。

(1) 川嶋武調整員

赴任以来、MR Iはもとより、政府関係機関との連絡に意を用い、巧みな語学力、豊富な経験と積極的な姿勢で、counterpartsとの交渉に当たっている。とくに hartal の困難期を無事に乗りきり、技術協力実施の円滑化に貢献している。counterpartsの信頼も厚い。

(2) 松下福代獣医(実験動物センター)

実験動物センターが実際運営されるまでの準備として、現地調達可能な機材の整備を行っている。また、こまかい事務的な作業も積極的に進めている。明るくて積極的な姿勢がcounterpartsによく受け入れられており、対人関係も良好である。

(3) 近く派遣が内定したのは次の通りである。

藤沢信義助手および前田宜俊技官の短期派遣(実験動物センター)：実験動物センターへの動物搬入の前後に派遣される。

渡辺比登志技師(技師学校教育および血液学)、小諸のり子技師(電顕)の両名は1990年4月または5月に赴任予定である。

3-3-3 機材供与

1989年度の機材供与は日本における研修に参加した部門を主に考慮して配分した。とくに、ゼロから出発するに等しい実験動物センターと検査技師学校(ないし教育設備)および感染症のうち、とくにウイルス学と微生物学部門に重点をおいた。日本側の重点的配分に対して、counterparts側の案は従来の各部門の希望をそのまま寄せ集めた総花的なものであり、その上、新しい部門やconsultantを欠く部門への考慮が少なく、新体制をめざすものとはいいがたかった。先方の説明として、準拠したカタログが新旧様々で、日本の現在の価格に関する情報が得難く、苦勞したとのことで、この点は十分了解した。

決定した総額は大幅に当初予算を超えたが、この間の関係者の特別の配慮を多とする。

一部現地調達部分を除き、目下入札途中のため、機材の現地到着は遅れている。

3-3-4 土地・建物の取得

懸案の動物餌製造機材の設置場所をめぐり、MRI隣接の土地が最適であり、早急な取得が必要であるとの結論に達した。そこで保健省をプッシュした結果、急遽Fernando次官が農林省側と折衝し、後者管理下の同土地の取得が決定した。この取得は1月末までに実現するとのことである。

3-4 今後の課題

3-4-1 MRIの将来構想と技術協力との関係（MRIの進路と関連して）

MRIは当面reference laboratoryとしての機能を充実させるが、技術協力の後期には研究センターとしての目標を掲げている。また、業務内容についても、将来大幅に地方病院に任すべき日常業務をかかえこんだまま新施設へ移行しようとしている。再編成の理念に沿った内部改革や将来構想がほとんど先方から語られず、また模索しかねているかにみえる。これらは、現時点では望むのが、無理とも思えるが、たえずこの原点を喚起し続ける必要がある。

3-4-2 予算の決定

1989年度の供与機材の決定はほとんど日本側で主導権が行使された。それは技術協力の主体が日本における研修にあったこと、いくつかの協力部門がゼロからの出発であったこと、日本における調達が主であったことなどからである。

1990年度の機材購入は現地調達を主とし、必要なもののみ日本から送ることとした。その結果、先方から示された予算の部門別内訳は、4-3に示す通りである。これに対して、技術協力が進行中の実験動物センターや技師学校への配分がゼロであるのは合理的でないとクレームをつけたところ、前年度に十分配分されている、これらへの配分によってMRI本来の研究活動が犠牲にされたくないとの釈明があった。今後の検討課題となろう。

3-4-3 作業衣着用

新研究棟においては白衣を着用するよう提案したが、中級レベル職員より抵抗があった。これに対して、Coordinationg Committeeにおいて、Fernando次官が、これはユニホームではなくて作業衣であり、この着用は業務命令であるとの発言があった。ただ、カーテンによる仕切りなど、検討することとした。

3-4-4 蛇毒抗血清製造問題

蛇毒抗血清製造は保健省では重点項目としているが、本格的な製造は本プロジェクトの枠を超える。また、MRI自体は消極的である。そこで、問題点を明確にして、今後の方針を確認するために、G. Fernando局長補佐を交えて協議した。その結果、保健省の意向は、①蛇毒抗血清製造を新しいプロジェクトとする、②設置場所にはMRIの裏の土地をあてたい、③しかし本件は緊

急を要するプロジェクトなので、当面の試験製造をMRIで開始してほしい、とのことであった。

しかし、MRI内部に蛇毒抗血清製造に関心をもつ人材が得られるかどうかが問題である。したがって、当面日本における研修員受入れの計画を早める機運は熟していない。

3-4-5 MRIスタッフ新定員数の決定

前記のように新定員数の決定がみられたが、その採用への道のりは遠い。MRI就職を促すためのなんらかの報償（incentives）をヴィクターナ所長が要望したが、Fernando次官は新研究棟でよい設備を使って働けるのがincentiveであるとして、給与面の優遇策を考慮していないと述べた。

最近数人の新しいmedical officersが採用されたが、その二・三名に尋ねたところ、MRIへの依頼全体があまり多くなく、ルーチン業務が正常化していないため、彼らの実務上のtrainingは極めて不十分であるとのことである。

4. 今後の協力計画

4-1. 専門家派遣

日本からの今後の専門家派遣が先方より要望された。

免疫学： 免疫学検査室のセットアップ、必要機材のリストアップならびに指導

ウイルス学： 各種ウイルス検査試薬の作成指導

生化学： WHO標準検査法に基づく検査のワークショップ

病理学： Dr. Tisseraが大西教授と協議の上決定する

細菌学： 前記研修員帰国後に派遣を希望、その後ワークショップ開催を希望

4-2. 研修員受入れ

1990年度の研修員について、次の2名を面接の上、内定した。いずれも、医師であり、臨床研修を終ってから新たに採用されて、細菌学についての研修を始めたばかりである。細菌学関係のため、新潟大学光山教授、予研関係者と協議の上、研修先を決定することとした。

(1) Dr. M. P. D. Gunatillake (細菌学、嫌気性菌)

(2) Dr. (Mrs) G. K. D. Karunaratne (細菌学、腸内細菌)

これらの研修予定者はなおしばらくの研修を現地でした後、日本における研修に入りたいとのことで、来日は年度後半の予定である。

(3) 第3の候補者として医昆虫学が提案されたが、日本が研修に適切かどうか疑問であると指摘したところ、1987年における日本の共同研究グループの研究者をあげてきた。現在、先方ではまだ候補者が採用されていないので、今後の検討課題とした。

4-3 機材供与

MR I側は現地調達を主体とし、予算の決定も自主的にやる意向を示し、これを原則として了承したが、技術協力の進行している実験動物センターや技師学校への配分がない点につき、今後充分相手側と協議する。

示された各部門への配分案は下記の通りである。リストの早期提出を求め、帰国直前にこれ入手した。MR I側のリストについて、川嶋調整員が機材と試薬類に分け、現地調達の可否を検討するとともに、重複供与を避けるためコンピューター管理をすることにした。

(2年度分)

細菌学	33%
ウイルス学	12%
病理学(電顕)	10%

免疫学	15%
昆虫学	10%
薬理学・薬用植物	5%
ワクチン製造	5%
生化学	5%
書籍	5%
計	100%

(全体の35%を機材、65%を薬品、試薬)

また、1990年度の予算については、概ね上記資機材供与に充てられるが、今後の整備運営の実情をみた上で分割配分することになった。

なお、動物の餌製造施設設置場所として、隣接する土地および建物の入手が確定したので、ペレットマシン、乾燥機、粉碎機などの配置、配線、配管、空調のための工事設計を進めていくことになった。

作業衣の洗濯設備については、土地および建物の入手が同様確定したが、今後の推移をしばらく見守り、とりあえず複数の大型洗濯機を用意させることにしたい。それまでは、洗濯は各自に任せることになった。

4-4. ワークショップ開催

4-4-1 免疫学ワークショップ

1989年8月開催予定で準備されたが、hartalで流れたので、今後随時個別でよいから行ってほしいとの要請があった。

4-4-2 生化学検査 (WHO公認検査法) ワークショップ

病院検査技師にWHO公認の生化学検査法を教育するワークショップが提案された。講義と実習を含み、2週間の予定で計画されている。1990年12月以降開催を目途とするが、日本から講師の派遣もあわせて要請された。予算案を含めて日本側で検討の上、返答することとした。

4-5. 本プロジェクトの広報資料作成

川嶋調整員およびMRIスタッフの協力のもと、50ページほどのパンフレット2,000部を英語、シンハラ語、タミル語でカラー印刷する計画である。

4-6. その他の具体的な指導内容

4-6-1. 作業衣着用

危険な検査・研究に従事する場合、また汚染の心配される場合に備えて、作業衣の着用を強く勧告する。民族衣装であるサリーは向いていないことを教育する。更衣室の整備が必要ならば、

可能な限り対応する。

4-6-2. 機材のnumberingとlisting

供与機材の管理を容易にするため、numberingとlistingを勧告した。

4-6-3. 各種working committeeの設置

差し当たって、新研究棟への移転、旧研究棟の利用計画（所長より素案の説明があった）などを検討する。

4-6-4. 協力計画の手直し

1990年度においても研修員の受入れ、専門家の派遣に懸案事項を残しているため、1年後に再度手直しが必要であることを相互に了承した。

4-7. 無償資金協力について

今回の調査目的には、無償資金協力による建築の進行状況を視察して、微調整の必要があるかどうかを検討することになった。hartalのため予定より約1か月工事はおこなわれているが、95%終了、最終段階にある。工事責任者にも同行してもらい、MRI関係者の意見も徴して次の諸点を要望し、返答ないし対応を求めた。工事社側は、追加・変更分についてスリ・ランカ側の意向を確認し、要請文書として出してもらい、対応することになった。要望事項のうち、対応が了承された主な点は、次の通りである。

- 1) 女子更衣室のプライバシー確保：先方の希望を聞いて対応する。
- 2) 実験動物センターの飼育室の流し台設置：SKが作業上不適であるとの指摘に対して、感染系7室について、可動の流し台をつけ、給水は高さを調節する。その他の飼育室や動物実験室についても、技術協力予算で改善を計ることになった。
- 3) 電顕準備室の排気：状況を静観するが、不都合があれば、手を加える（卓上フードを技術協力で入れる）
- 4) 餌製造機材の設置：予定される別棟までの電源、給水は無償資金協力の枠で行う。
- 5) 実験動物センターのうち、感染実験区の空調に不安を残す：始動後点検をして対処する。

5. プロジェクト実施上の留意点

スリ・ランカの国内治安情勢はかなり鎮静化し、外国人観光客も増えており、市街も賑わっている。しかし、主要道路の要衝に検問所があり、各所に警官や軍隊が警戒に当たっている。財政の好転もまだ期待できないので、MRI側の予算が新研究棟の運営に見合うだけの増額を期待できるかどうか疑問である。朗報としては、全国の大学が2年ぶりに再開され、優秀な後継者を迎え入れる可能性が出てきたことである。

若い研究者を迎えて、新たな研究所作りに大きな期待と意欲をふくらませていることは容易にうかがえる。2度の双方主催の懇親会において、主任クラスの検査技師が招待されるようになったことも、画期的な変化である。

MRIの再編成への対応が不十分なことに関連して、ヴィタラナ所長は過渡期を寛容にみてほしい、時間をかけてほしいと訴えた。性急な催促は現在の良好な相互関係を傷つける結果になるかもしれない。

チームリーダーを欠いているので、プロジェクトの円滑化には国内委員が交互に現地に専門家として短期出張することが次善の策であろう。

資 料

1. ミニッツ
2. MRI組織図
3. MRI主要スタッフリスト
4. 第1回コーディネーティングコミッティー議事録
5. MRI 1988年度年報

資料1 ミニッツ

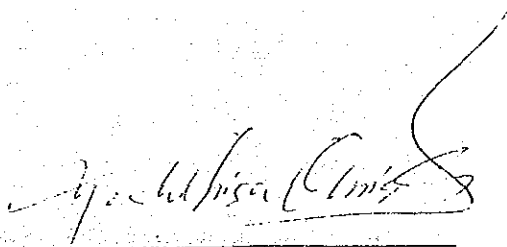
MINUTES OF DISCUSSIONS
BETWEEN THE JAPANESE PLANNING AND CONSULTATION SURVEY TEAM
AND THE AUTHORITIES CONCERNED OF THE GOVERNMENT OF THE DEMOCRATIC
SOCIALIST REPUBLIC OF SRI LANKA ON THE MEDICAL RESEARCH INSTITUTE PROJECT

The Japanese Planning and Consultation Survey Team (hereinafter referred to as "the team") organized by the Japan International Cooperation Agency and headed by Professor Yoshihisa Ohnishi visited the Democratic Socialist Republic of Sri Lanka from January 7 to 14, 1990, for the purpose of reviewing the activities concerning the Medical Research Institute Project (hereinafter referred to as the "the Project") evaluating them, and modifying the implementation plan for the Project when necessary in keeping with the Master Plan in Annex I of the Record of Discussions signed on August 30, 1988.

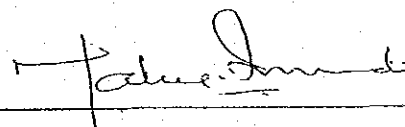
During its stay in the Democratic Socialist Republic of Sri Lanka, the Team observed the over-all progress and had a series of discussions with the Sri Lankan authorities concerned about evaluation and more desirable implementation of the Project.

As the result of discussions, both parties confirmed the items which are described in the attachment.

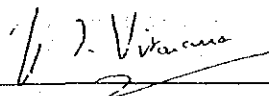
Colombo, January 12, 1990



Prof. Yoshihisa Ohnishi
Leader, Planning and Consultation
Survey Team, Japan International
Cooperation Agency



Dr. S. D. M. Fernando
Secretary, Ministry of Health and
Women's Affairs



Dr. Tissa Vitarana
Director, Medical Research Institute

ATTACHMENT

1. General review

The Project started on the first of January 1989 for five-years for the purpose of improving the functions of the Medical Research Institute (hereinafter referred as "MRI") and enabling it to play a more active role in the control of diseases in the Democratic Socialist Republic of Sri Lanka.

In accordance with the Record of Discussions signed on August 30, 1988, JICA has dispatched 2 long-term experts and 5 short-term experts and has accepted 5 counterparts for training in Japan, and also has provided the equipment necessary for smooth implementation of the Project.

Due to the domestic disturbances of Sri Lanka, there have been some substantial modifications in the original Tentative Schedule of Implementation (hereinafter referred as "TSI"). However, both sides came to the agreement that from now on our effort should be concentrated to develop the technical cooperation activities as described in the original TSI as faithful as possible.

2. Achievement of the Project

The technical cooperation activities under the Project in Japanese fiscal year (hereinafter referred to as "FY") 1988 and 1989 have been carried out as shown in Annex I.

3. Technical cooperation in FY 1990

The technical cooperation activities in FY 1990 would be carried out in line with the Annual Work Plan as shown in Annex II.

4. Modification of the TSI

The Tentative Schedule of Implementation signed on August 30, 1988 was modified as shown in Annex III. The activities after FY 1991 will be discussed at the later date.

5. Detail of the discussions

Both sides agreed to record the following to implement the Project more smoothly and fruitfully:

5-1. The training programs in Japan

1) Counterpart in pharmacology for FY 1989

The following fields have been proposed for the training by the Sri Lankan side:

- (1) pharmacological effect analysis of drugs and traditional medicine
- (2) hormone assays of clinical significance
- (3) clinical trials of new drugs
- (4) drug quality control.

They stated further that the four fields had been listed in order of priority.

2) Counterparts in bacteriology for FY 1990

The department head concerned justified the decision to have the two medical officers' training in the field of anerobic bacteriology and enteric bacteriology. The possibility and details of their training will be considered by the Japanese experts concerned later.

3) Counterpart in entomology for FY 1990

The acting head of the department submitted a proposal indicating the areas to be covered in the training program in Japan. Japanese side suggested that entomology was not much practiced in Japan and that it may be preferable to give the training in parasitology instead. However, the acting head of the department had already discussed the training program with the competent authority in Japan. So Japanese team will try to get the assistance of the appropriate persons before finalising the program.

5-2. Japanese experts in FY 1990

1) Experts in MLT education, electron microscope and animal house

Japanese side mentioned that the long term experts in MLT education and in electron microscopy will come to Sri Lanka in April or May 1990. And two short term experts in animal house are planned to come for successive period of three months commencing the beginning of FY 1990.

2) Expert in immunology

Sri Lankan side requested the dispatch of a clinical immunologist to set up an immunology laboratory. He will be supposed to draw a list of equipment and reagents in consultation with his Sri Lankan counterparts and also to commence the training of 2 immunologists and make suitable plans for the future training of one of them in Japan.

3) Expert in Virology

Sri Lankan side stated that a suitable Japanese expert is needed to help Sri Lankan counterparts to prepare kits for the diagnosis of rota virus, HIV(western blot), hepatitis A-IgM, rubella IgM -IgG and cytomegalovirus and to set up a respiratory virus diagnosis. The Japanese side mentioned that their requests would be studied in Japan and they would try to find possible measures.

4) Expert in pathology

The acting head of the department will be contacted by Japanese delegation regard to the work area of the Japanese expert.

5) Expert in Bacteriology

Sri Lankan side requested that an expert in bacteriology(anaerobic and enteric) come to Sri Lanka after the return of the two medical officers. And also they requested that towards the end of the visit of Japanese expert, a workshop should be held in these areas of bacteriology and if possible, combined with some immunology related in bacteriology. The Japanese side mentioned that these requests would be studied as the technical cooperation of FY 1991.

5-3. Workshop

- 1) The factors which prevented the Immunology workshop from being held were mentioned by the director of MRI, and he requested an effort should be made to hold it in sequence.
- 2) Regarding to the workshop aiming to train hospital MLTT in WHO-approved method and tests in biochemistry, the acting head concerned outlined the reasons for holding such a workshop and why it was necessary to improve and standardise the techniques in the hospitals. Both sides agreed to hold this workshop after December 1990 so as to enable the Japanese expert and the acting head concerned to participate. The workshop is to include both lecture and practice.

5-4. Publicity of the Project

The Japanese coordinator mentioned that along with the person appointed by the director of MRI, it was proposed to produce 2000 copies of a 50 pages information and publicity document of the Project. This would be produced in English, Sinhalese and Tamil and be in colour.

A W

T.C.

5-6. Provision of the equipment

There were considerable difficulties in purchasing equipment and supplies in FY 1989, the director of MRI explained that due to the non availability of current prices in Japan, it was difficult to prepare a consolidated list of requirements for the Project. He confirmed that for FY 1990, a consolidated list of the equipment would be submitted to JICA as early as possible, and that these items should be purchased locally as much as possible.

5-7. Maintenance Staff

To ensure proper maintenance of the equipment, it was decided that the Ministry of Health should be asked to recruit staff for the maintenance unit before the end of January, 1990.

5-8. Anti-Snake Venom Program

The director of MRI reported that the Ministry of Health had taken a decision to develop a separate project for the production of anti-snake venom, setting up a new building on the land to be obtained from other ministry. However the ministry authorities expressed their hope that the present MRI Project and its facilities may be utilised for the pilot study, which may be helpful for the new project.

5-9. Space for pelleting machine, etc.

Building space for the pelleting machine and other machines for preparing and storage of animal food, etc. is approved to be accommodated in the buildings which belongs to the marketing department land of the Ministry of Agriculture at present.

5-10. Work clothes

Though there was some opposition by sections of the middle grade staff to wear new clothes, Sri Lankan side expressed that it should be possible to overcome the resistance and implement this scheme.

Handwritten initials

Handwritten initials

Annex I Technical cooperation activities achieved in FY 1988 and 1989

1. Dispatch of the experts from Japan

Field	Name	Term
1) Long term experts		
Coordinator	Mr. Takeshi Kawashima	Jun 1989-present
Animal House	Dr. Fukuyo Matsushita	Dec 1989-present
2) Short term experts		
Cooperation Planning	Dr. Kenichi Kojima	Jun 1989 (1 week)
"	Dr. Jun Soga	"
Experimental Animal	Dr. Norimitsu Sato	August 1989 (2 weeks)
"	Dr. Nobuyoshi Fujisawa	" (")
"	Dr. Fukuyo Matsushita	" (1 month)

2. Training of Sri Lankan personnel in Japan

Field	Name	Term
1) FY 1988		
MLT Education	Mrs. M.S. Beauchamp	Jan 1989-July 1989
Virology	Dr. N. Withana	Mar. 1989-Dec. 1989
* Medical Equipment	Dr. W.M.H.M. Herath	Feb. 1989-Dec. 1989
		* (sent by the grant aid)

2) FY 1989

Electron Microscope	Dr. R.K.A. de Tissera	Jun 1989-(April 1990)
Experimental Animal	Dr. S. Jayasekera	July 1989-(Jan. 1990)

3. Provision of the Equipment

The equipment necessary for the Project (total amount ¥ 70,000,000) are now under the auction in Japan (partially have been supplied by local purchase).

Annex II Annual Work Plan for FY 1990

1. Dispatch of the experts from Japan

Field	Name	Term
1) Long term experts		
Coordinator	Mr. Takeshi Kawashima	Jun 1989-May 1992
Animal House	Dr. Fukuyo Matsushita	Dec 1989-Nov. 1990
MLT Education	Mr. Hitoshi Watanabe	May 1990-Apr. 1991
Electron Microscope	Ms. Noriko Komuro	May 1990-Apr. 1992
2) Short term experts		
Virology	Candidates and term under further consideration	
Pathology	"	
Immunology	"	
Animal House	2 experts * 3 months	
Biochemist for workshop	at the biochemistry workshop	
Maintenance Engineer (E.M.)	1 week at the beginning of FY 1990	

Other experts necessary mutually agreed upon

2. Training of Sri Lankan personnel in Japan

Field	Name	Term
1) FY 1989		
Pharmacology	Dr. T.M.J. Munasinghe	1 year (from Mar. 1990)
2) FY 1990		
Enterobacteriology	Dr. P D Gunatillake	1 year
Anaerobic bacteriology	Dr. G K D Karunaratne	1 year
(Entomology)	not decided yet	1 year

3. Provision of the Equipment

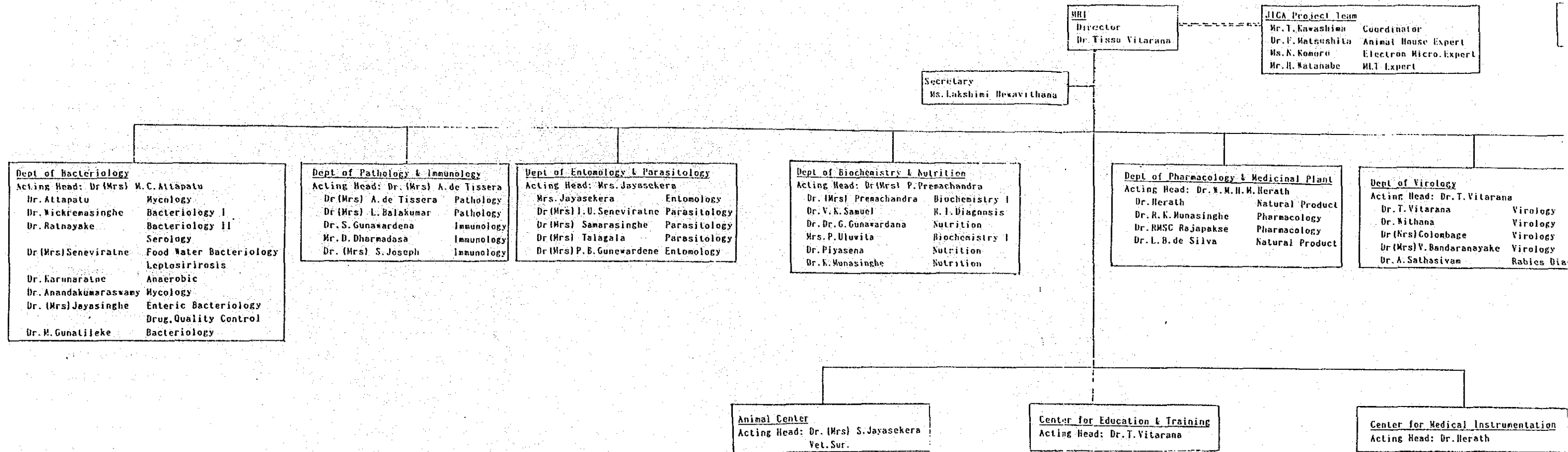
Necessary and appropriate equipment for the Project will be provided within the range of Japanese allocated budget.

Jo *h* *n*

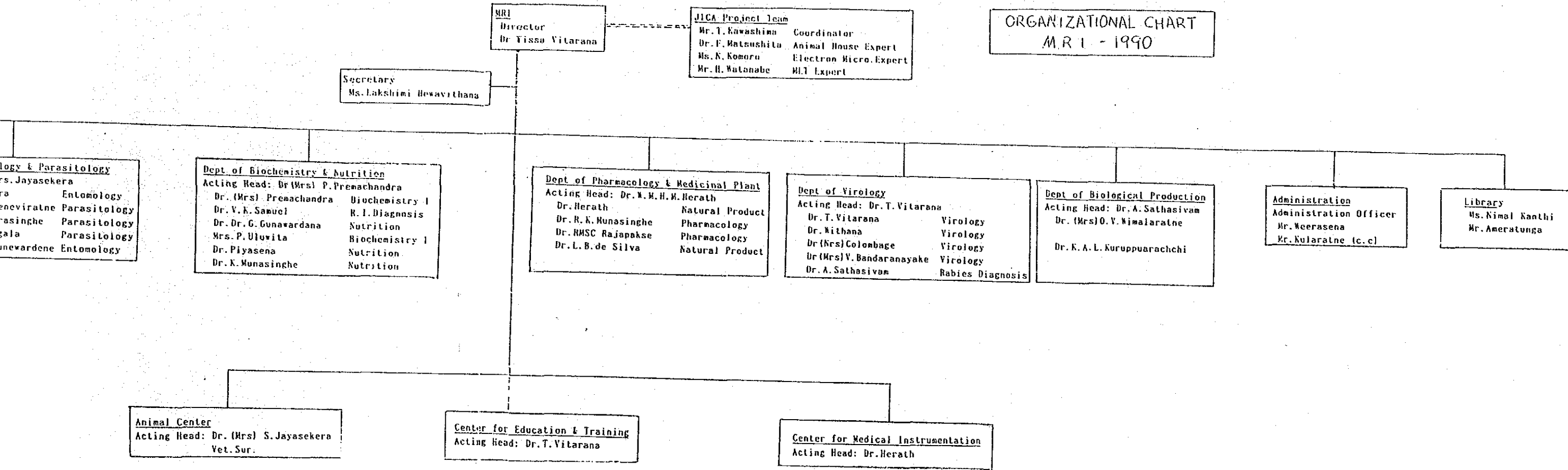
FY		1988	1989 April	1990 April	1991 April
Japanese Expert	(long term expert) Coordinator		Mr. Kawashima		
	MLT Electron Microscope Veterinary Surgeon			Mr. Watanabe Mrs. Komoro	
	(short term expert) Cooperation planning Animal House		Dr. Kojima, Soga Dr. Sato, Fujisawa, Matsushita	Dr. Maeda, Dr. Fujisawa	
	Virology * Immunology * Pathology * Biochemistry Workshop Maintenance Engineer				*Candidates and term will be decided later
SriLankan Trainees	(FY 1988) MLT Education Medical Instrument Virology	Mrs. Beauchamp Dr. Herath Dr. Withana			
	(FY 1989) Electron Microscopy Experimental Animal Pharmacology		Dr. Tissera Dr. Jayasekera	Dr. Munasinghe	
	(FY 1990) Enteric Bacteriology Anaerobic Bacteriology (Entomology) *			Dr. Gunatilaka Dr. Karunaratne	*Candidates and term will be decided later
Equipment		The equipment will be supplied by local purchase as much as possible			
Workshop					Biochemistry workshop
Survey Team			Planning and consultation		Advisory

————— achieved
----- to be achieved

資料2
MRI 組織図
及び主要スタッフ



ORGANIZATIONAL CHART
M.R.I. - 1990



資料3 MRI主要スタッフリスト

THE NAMES OF THE MEDICAL OFFICERS & RESEARCH OFFICERS AT MRI

Medical Officers

	<u>Name</u>	<u>Age</u>	<u>Exp.</u>	<u>Department</u>	<u>Designation</u>
1.	U T Vitarana	55	24	Director	Virologist
2.	A Sathasivam (Re emp.)	63	33	Rabies	Virologist
3.	T J P Ratnayake (Re emp.)	72	5	Bacteriology	Bacteriologist
4.	R S B Wickramasinghe	52	20	Bacteriology	Bacteriologist
5.	M C Atapattu	54	12	Act.Dep.Director	Bacteriologist
6.	N Withana	46	14	Virology	Virologist
7.	R K A de Tissera	47	2	Pathology	Pathologist
8.	D G R Gunawardene	52	3	Nutrition	M.O.
9.	B V de Mel (Re emp.)	67	33	Nutrition	M.O.
10.	C L Piyasena	40	5	Nutrition	M.O.
11.	T M J Munasinghe	32	6mo.	Pharmacology	M.O.
12.	O V Wimalaratne	35		Vaccines	M.O.
13.	G S S K Colombage	38	3	Virology	M.O.
14.	V Bandaranayake	35	3	Virology	M.O.
15.	J T S Savarimuttu	32	3	Pathology	M.O.
16.	S Gunawardene	36	3	Immunology	M.O.
17.	R S D Seneviratne	35	1	Bacteriology	M.O.
18.	P D M Gunatilake	30	3mo.	Bacteriology	M.O.
19.	K D Karunaratne	31	3mo.	Bacteriology	M.O.
20.	P D S M Gunawardene	32	3mo.	Entomology	M.O.
21.	R K Munasinghe	3	3	Nutrition	M.O. (Temp.Staff)
22.	L Balakumar	40	3	Pathology	M.O.
23.	I U de A Seneviratne	38	3	Parasitology	M.O.
24.	P Chandrasiri	36	3	Bacteriology	M.O.
25.	R M S P Rajapakse	37	14	Pharmacology	M.O.
26.	R Ananda Coomaraswamy	41	1	Microbiology	M.O.
27.	S Samarasinghe	30	3	Parasitology	M.O.
28.	T A P M Talagala	29	3mo.	Parasitology	M.O.
29.	W A Nanayakkara	38	3	Virology	M.O.
30.	A C de Alwis	3	3mo.	Immunology	M.O.

31. K A L A Kuruppuarachchi	27	3mo.	Production	M.O.
32. M Jayasinghe	28	3mo.	Bacteriology	M.O.
33. C N Gunasekera	38	3mo.	Virology	M.O.
34. P Somaratne	38	3mo.	Bacteriology	M.O.
35. K S P Jayathilake	35	2wks.		M.O.

Research Officers (Permanent Staff)

1. L B de Silva (Re emp.)	67	43	Natural Product.	R.O.
2. V K Samuel	56	25	Nuclear Medicine	R.O.
3. P Premachandra	51	25	Biochemistry	R.O.
4. N Jayasekera	47	10	Entomology	R.O.
5. W M H M Herath	45	10	Natural Product.	R.O.
6. P Uluwita	44	10	Biochemistry	R.O.
7. K Kulathunge	30	2	Bacteriology	R.O.
8. D Dharmadasa	32	5	Biochemistry	R.O.

Veterinary Surgeon

1. S Jayasekera	30	9mo.		
-----------------	----	------	--	--

MLT (Permanent Staff)

1.	J B Fernando	56	8	Supdt. Stores
2.	U Rajapakse	56	12	TAB
3.	M B de Silva	56	12	Maintenance
4.	V Somasundaran	54	5	TAB
5.	D K C Amarasinghe	46	23	Parasitology
6.	M M Dasanayake	47	25	Pathology
7.	V H Bandula	44	18	Nutrition
8.	D N L W Jamanna	45	26	ARV
9.	B H Cooray	53	18	Media
10.	P S V W Jinapala	46	23	PSVW
11.	N Prisoody	48	22	Pharmacology
12.	S Sampasivam	47	15	Bacteriology
13.	P Wickramasinghe	40	13	Pathology
14.	S Selvarajah	51	12	Food & Water
15.	M Amarasiri	58	30	Stores
16.	D S Wijesekera	54	31	Bacteriology
17.	W M M Weeraratne	40	20	Bacteriology
18.	H D N Gunasekera	35	4	Virology- MRI
19.	K Kuganesan	50	14	Virology - Kalubowila
20.	U C Hettiarachchi	43	21	Virology-Kalubowila
21.	P K Jayaweera	38	10	
22.	S M W W B Rajapakse	35	12	Virology - MRI
23.	S Rajasuriya	53	14	Biochemistry
24.	K S T Karunapala	31	8	Biochemistry
25.	S A L P Suraweera	32	8	Bacteriology
26.	S Tennakoon	32	8	Bacteriology
27.	K N M Perera	30	6	Natural Production
28.	A P P Gajanayake			Media
29.	T M A N Jayasuriya	29	5	Bacteriology
30.	S M N R B Abeykoon	24	2	Pathology

31. M Sokkalingam	52	16	Food & Water
32. S V Galhena	56	26	Parasitology
33. M Pathiarachchi	46	6	Parasitology
34. M S P Munasinghe	46	22	Parasitology
35. M A de Silva	42	1	Bacteriology
36. H H K K Jinapala	39	17	Entomology -Kalubowila
37. K S N Jayaratne	41	17	Nutrition
38. K M I Karunaratne	38	12	
39. K Gunasekera	47	11	Immunology
40. D M L C Hettiarachchi	33	12	Virology - MRI
41. D K D Silva	42	16	Biochemistry
42. C Nagahawatta	41	3	Biochemistry
43. K L Peiris	38	5	Virology - MRI Virology - MRI
44. Nanda Jayawardene	43	1	Virology
45. B C Rupasinghe	28	6	Microbiology
46. B Y Gamage	28	3	Biochemistry
47. K C R Pereira	29	3	Bacteriology
48. S N Tambawita	27	3	Pathology
49. D S S Gunawardene	34	2	Natural Production
50. D M L C Basnayake	32	2	ARV
51. M A Malkanthi	28	14	Microbiology
52. K D S Anestic	28	9mo.	Virology
53. K Selvadurai	30	9mo.	Bacteriology
54. G R C Wimalawickrama	29	9mo.	Seerology
55. L B lankathilake	27	9mo.	Virology - Kalubowila
56. H M M Kunaritiachy	27	9mo.	Virology - Kalubowila
57. M A T N Kularatne	28	9mo.	Entomology - Kalubowila
58. Dammika Atukorala	26	6mo.	Bacteriology
59. C A Basnayake	28	1mo.	ARV
60. Y P Kandewatte	24	1mo.	Virology

61. J K Dissanayake	24	1mo.	Biochemistry
62. G K Nandawathie	34	1mo.	ARV
63. K N Abeyweera	28	3wks	Pharmacology
64. L A Lenagala	47		MLT School
65. M S Beachamp	49	28	MLT School

資料 4. 第 1 回コーディネーティングコミッティー議事録

MELTING OF COORDINATING COMMITTEE

A meeting of the coordinating committee of the MRI Project met at the Office of the Secretary/Health on 22.12.89 at 11.00 a.m.

Those Present

Dr. Malinga Fernando, Secretary Health

Dr. George Fernando, DDG (LS)

Dr. Tissa Vitarana, D/MRI

Dr. Maya Attapattu

Dr. A. Sathasivam

Dr. P. Premachandra

Dr. Nalini Jayasekera

Mr. Yasuki, Head of the JICA Mission in Sri Lanka

Mr. Kawashima, Coordinator for the MRI Project

Mr. Nishimura, Chief Engineer, KUME Architects & Engineers

The following discussion took place:-

Mr. Yasuki expressed dissatisfaction about the progress made so far by the Sri Lankan side with regard to the arrangements for the receipt of aid. He felt that the MRI should define very clearly its position with regard to technical corporation. Some key persons should be identified to handle this aspect. If this was not done, he felt that the maximum benefit would not be obtained from the visit of the Japanese team.

The meeting decided that the Coordinating Committee should discuss the following points and draw up an agenda for discussion with the Japanese Team.

- (a) Review the technical cooperation programme for 1990.
- (b) Define equipment needed and also identify suitable placements for staff trainees and Japanese experts.
- (c) Any minor modifications to the building should be defined clearly.

(The MRI staff should meet at a sub-committee level and discuss these issues first and then bring it to the coordinating committee for discussion.)

At this stage it was pointed out that right at the inception a coordinating committee from the MRI was appointed and that Professor Ohnishi wanted that committee to meet

regularly before and throughout the period of technical cooperation. As this was not implemented, it was agreed to reactivate this committee which will be required to carry out these functions.

Specie for the MRI Buildier

DDG (LS) to send a letter immediately to the Marketing Department regarding land for the MRI—to obtain all the land without payment.

Work dress for the Staff MRI

It was pointed out that there were problems in implementing this by the middle grade staff who were, in general, opposed to the idea of changing their couths in the laboratories. The S/H felt that he could send a circular effect this proposal and that those who were opposed to these changes should be replaced. It was also agreed that the staff who do not wish to work in the MRI and those whose work is not satisfactory should be replaced by better workers in order to improve the standards of work. The D/MRT was to communicate with Director Establishment on this question.

Additional Staff

DDGLS undertook to fill the vacancies in the existing caare as quickly as possible. D/MRI reported that the Treasury had turned down the request for New Cadre and that he had submitted a fresh request justifying each post. with regard to new cadre it was not possible to provide all staff requested but an attempt was to be made to recruit maintenance staff before February. Aktransfers out of the institute will be replaced.

Incentives for Staff at the MRI

In response to a request from D/MRI, the S/H said that it may not be possible to give an incentive allowance but other forms of incentives could be explored.

Opening Ceremony

To be fixed for April 1990

To conbente another meeting of the main committee if problems arise. In the meantime, the MRI subcommittee to work out all details.